

- ① 電子カルテの一元化で、医療の質とサービスを向上
 - ・診療科レポート「血液内科」
 - ・季節のお話／花粉症にご注意
- ② 栄養サポートチーム (NST) のご紹介
 - ・平成26年度名大病院災害訓練
 - ・ミニニュース
 - ・ナディック通信
- ③ 名大病院アメニティのご紹介
 - ・病院からのお知らせ
 - ・中央採血室リニューアルのお知らせ
 - ・名大病院のユニフォーム刷新について
 - ・ボランティアさんへの感謝状授与式と懇談会を開催
 - ・ボランティアさん募集
 - ・禁煙のお願い
- ④ がんによる心身の苦痛を和らげる緩和ケアチームが充実
 - ・健康講座／脳神経外科
 - ・看護師募集
 - ・かわらばん HPのご案内

名古屋大学医学部附属病院

理念 ● 診療・教育・研究を通じて社会に貢献します。基本方針 ● 一、安全かつ最高水準の医療を提供します。一、優れた医療人を養成します。一、次代を担う新しい医療を開拓します。一、地域と社会に貢献します。

〒466-8560 名古屋市昭和区鶴舞町65番地 TEL 052-741-2111 (代表)

http://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/

ホームページで「かわらばん」のバックナンバーがご覧いただけます

TOPICS ① 電子カルテの一元化で、医療の質とサービスを向上

以前、カルテは医師が紙に書いていましたが、現在はコンピュータに入力しています。この「電子カルテ（病院総合情報システム）」の維持・管理を行っているのが、メディカルITセンターです。センターの取組みについて、センター長の白鳥義宗病院長補佐にお話を伺いました。



大規模なシステム変更を検討
私は他大病院で消化器内科医のかたわら、全国でも極めて先進的な病院情報システムを独自に構築してきました。昨年1月に名大

電子カルテのデータは、院内で共有が進めば、業務の改善・効率化、医療の質のさらなる向上につながります。しかし、現在はシステムが診療科ごとに異なるため100以上の部門システムがあり、共有化の大きな妨げとなっています。

待ち時間が短くなる

「大病院は、診察も検査も会計も時間がかかる」と言われてきましたが、全ての情報がネットワークで結ばれると、待ち時間短縮にも繋がります。たとえば、患者さんが採血の後にCTやレントゲンを撮って診察室に戻ってくると、自分の臓器がコンピュータ画面の中で3Dの立体画像となって映し出されている。診察を終えて会計へ行くと、すぐに支払いができるということも可能になります。

3Dはすでに複数の診療科で手術の説明に用いられています。患者さんからは「どこが悪いのか、どういう治療を受けるのかが目瞭然」と好評です。

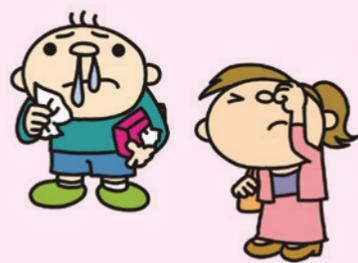
患者さんの満足度が上がれば、職員のやる気も増します。患者さんから「ありがとう」と言われるような、質が高く温かみのある医療に貢献できるシステムを構築したいと考えています。

医療に欠かせないコンピュータ

現在の医療機器のほとんどはコンピュータで制御されています。血液検査、超音波、CT、MRIなど全てそうです。患者さんの診療記録を始め、検査で得られた画像情報などは電子カルテに蓄積され、患者さんの医療に活かされています。

病院のメディカルITセンターのセンター長に就任しましたが、この経験は大きな力となっています。次の第7次システムでは、バラバラだった部門システムを一元化し、全ての情報の共有化を目指します。一挙に変えるのは無理なので、2018年頃の稼働を目標に、現在はシステム担当部署の集約、増員など組織の拡充、プログラムの開発・整備、マニュアルの作成など基本的なルール作り、ネットワークを有線から無線へというインフラ整備などを進めているところです。

季節のお話



花粉症にご注意

耳鼻いんこう科 外来医長 寺西 正明

現在、日本では約4人に1人が花粉症だといわれています。花粉症では、スギやヒノキなどの花粉が原因となって、くしゃみ・鼻水・眼のかゆみなどの症状が起こります。

東海地方では、2月から4月はスギ花粉、4月から5月はヒノキ花粉が主として飛散します。花粉症の時期には、セルフケアとして、マスクやメガネの使用で鼻と眼への花粉の付着を減らしたり、花粉の飛散量の多い日には、花粉の侵入を防ぐため、ドアや窓は閉めておくのがよいでしょう。花粉症の症状が出る前から、お薬による花粉症の治療を始めていると、花粉飛散シーズン中の症状を和らげることが可能ですので、例年症状の強い方は、かかりつけ医に相談されるとよいでしょう。

診療科レポート「血液内科」

血液内科長 清井 仁

みなさんは血液の病気にどのようなイメージをお持ちでしょうか？テレビドラマではしばしば、白血病は不治の病として扱われ、悲劇のヒロインが患う病気の代名詞のようになってしまっています。最近では、俳優の高倉健さんが、悪性リンパ腫で亡くなられたことが報じられ、血液の病気に対する一般的なイメージはあまり良くないようです。しかし、血液内科では、「がん」だけでなく貧血、血栓・止血異常症などの血液に関係する全ての病気を担当しています。すし、白血球やリンパ腫などの血液のがんは、最も治療が期待できる「がん」であることを知って頂けたらと思います。



手洗いは感染予防の基本です。血液の病気の患者さんは特に感染症に注意をする必要があるため、病院スタッフ一同手洗いを励行しています。皆さんも日頃から丁寧な手洗いを心掛けましょう。

血液の病気の多くは、入院での治療が終了した後も、外来での治療や経過観察を必要とします。外来での診察前に血液検査を必要とする患者さんも多いかと思いますが、その日の血液の状態によって安心して治療を受けて頂くために、ご理解と余裕を持った受診をお願いいたします。

栄養サポートチーム (NST) のご紹介

栄養管理部 田中 文彦

全ての病気に對して栄養管理は基本医療のひとつであり、患者さん個々の状態に応じて適切に栄養管理を実施することを栄養サポートとい、これを様々な職種の医療スタッフで実施する集団が栄養サポートチーム (Nutrition Support team: NST) です。

名大病院では、2009年11月からNSTが稼働しており、入院患者さんに対して栄養サポートを行う体制を整備しています。NSTのメンバーは医師、歯科医師、管理栄養士、看護師、薬剤師、言語聴覚士、臨床検査技師の職種から構成されており、老年内科教授をリーダーとして、耳鼻いんこう科、糖尿病・内分泌内科、消化器外科一、消化器外科二、消化器内科、腎臓内科、呼吸器内科、中央感染制御部、リハビリテーション部など多くの診療科・部の医師も携わっています。活動内容は、『食事が食べられない』や『体重が減少する』などの栄養不良が認められる場合に、主治医より栄養サポートの依頼が行われると、NSTにて回診とカンファレンスを実施し、依頼元の診療科へ適切な栄養療法について提案を行います。栄養摂取方法の選択では、可能な限り口から食べる楽しみを奪わないよう心がけており、患者さんと付き添いのご家族へ栄養療法の変更点などをお伝

えする際には、分かりやすい言葉を用いて説明をしています。2013年1月からは、NST自らが栄養不良の入院患者さんを抽出して、介入を行う取り組みも開始しました。NSTでは、構成メンバーによる学習会や講師を招へいしての講演会などを定期的に開催し、当院の医療スタッフへの栄養療法におけるスキルアップを図っています。また、当院は日本静脈経腸栄養学会よりNST専門療法士実地修練施設に認定されており、外部医療施設の医療スタッフに対しても、栄養管理における教育を実施しています。今後も入院患者さんの栄養状態の改善に寄与できるよう、NSTメンバーで協力をしていきますので、よろしくお願いいたします。



栄養サポートチーム (NST) カンファレンスの様子

平成26年度名大病院災害訓練

救急科長・EMICU部長 松田 直之

12月18日(木)に、名大病院で広域災害訓練が施行されました。東南海地震に備えて、名大病院も災害医療体制を整えています。今回の訓練も、平成25年4月に改訂した「名古屋大学医学部附属病院広域災害マニュアル」を用いた本格的訓練であり、医療系専門学校などの協力により模擬患者105名が設定されました。緊急性の高い順として、赤10名、黄20名、緑70名と設定し、ムラージュやアクションカードで患者さんを真似る名演技が多くの場所で見られました。

災害時においては、病院職員は、どのような条件で招集がかかるのか、次に院内のどこに災害対策本部が立ち上がるのかを知っていなければなりません。新マニュアルでは、名古屋市内震度6弱以上で、中央診療棟3階講堂に災害対策本部が立ち上げられます。本訓練では、本部立ち上げ、院内

各部署の安全確認、本部への情報連絡、トリアージおよび診療ブースの立ち上げがスムーズに行われるかが評価され、多くの職員の参加により災害マニュアルの実践と見直しが行われました。このような災害訓練とマニュアルの実践的な見直しにより、災害マニュアルがより充実したものとなると期待されます。その上で、常日頃から高い救急医療を実践していることが、名大病院の強みとなります。震災などの大規模災害は起きないことが望ましいですが、本年も名大病院は災害訓練を充実させ、マニュアルを整備することで災害医療を整えています。



災害対策本部の立ち上げ



トリアージの様子

ミニニュース

「コンサート」を開催しました

中央診療棟2階リハビリ広場に於て、10月29日(水)にピリカ会によるミニコンサート、11月5日(水)にレ・ヴィオレッタによるオータムコンサート、そして12月19日(金)にパーキンソン病友の会による合唱や合奏や、二胡演奏者によるクリスマスコンサートを開催しました。



ピリカ会によるミニコンサート



レ・ヴィオレッタによるオータムコンサート



パーキンソン病友の会による合唱や合奏



二胡演奏者によるクリスマスコンサート

Nagoya Disease Information Center ナディック通信



ウィッグ・頭皮ケア相談会のご案内

「広場ナディック」のおしゃれサロンでは、ウィッグやバンダナキャップの見本品を常時展示しています。おしゃれサロン内では、毎月第2、第4水曜日の月2回に主に化学療法に伴う脱毛についてお悩みの方を対象として「ウィッグ・頭皮ケア相談会」を開催しています。

お手持ちのウィッグのつけ方やお手入れ方法のご相談も可能です。今後とも定期的に開催して行く予定ですので、お気軽にお立ち寄り下さい。



◎ウィッグ・頭皮ケア相談会

- ・相談日：毎月第2・第4水曜日定期開催
- ・時間：11時～13時
- ・場所：広場ナディック おしゃれサロン内

「広場ナディック」

- ・場所 中央診療棟2階
- ・利用時間 平日10時～16時 (年末年始及びゴールデンウィーク除く)

TOPICS ③

名大病院アメニティのご紹介 Part 3

名大病院内にあるアメニティ施設から、本号では、「介護ショップ」と「レストラン 鶴友」をご紹介します。

介護ショップ

当店は、血糖値測定器などの医療機器、医療用テープ、大人用の紙おむつや尿取りパッドなどの衛生材料を中心とした各種介護用品の販売を行っています。

また、車椅子や介護用電動ベッドの販売やレンタルの取り扱い、住居内の手すりの設置やバス・トイレの改修など、住宅改修の斡旋相談もさせていただきます。

福祉用具専門相談員の資格を持つスタッフが、親切丁寧に接客しておりますので、お気軽にご来店下さい。お待ちしております。



店内の様子

場 所：オアシスキューブ
営業時間：(平日) 9時～17時



レストラン 鶴友

当店は、病棟1階にある「花の木」の姉妹店として、東南角の閑静な場所で営業しています。主なメニューは、日替わりランチのほか各種定食や麺類など、豊富に取り揃えており、お食事のお客様には、サラダ・スープ・味噌汁を自由に召し上がっていただける“サラダバー”が好評です。

また、広い店内で落ち着いた雰囲気の中で、ゆったりと過ごせるのも魅力的です。それ以外にも、パーティも承りますので、ご予算や日時などご相談下さい。ご来店をお待ちしております。

場 所：鶴友会館 1階
営業時間：(平日) 11時～16時 ※ラストオーダー：15時30分



外観の様子



店内

ボランティアさんへの感謝状授与式と懇談会を開催

12月22日(月)にボランティアさんへ日頃の活動に感謝して、感謝状の授与と懇談会を開催しました。名大病院では、毎年ボランティア活動を開始してから1年、及び5年毎に経過した際に病院長から感謝状を授与しています。今年度は1年表彰者が7名、5年表彰者が12名、10年表彰者が1名、15年表彰者が1名と多くの方々表彰されました。また、日本病院ボランティア協会からも3名の方々1,000時間表彰を受けられ、併せて授与式を行いました。石黒病院長から、感謝の言葉とともに、一人一人に賞状と記念品が手渡されました。

また、引き続き懇談会を催しました。和やかな雰囲気の中、松下患者満足度委員長と、若園副看護部長からボランティアさんへの日頃の労いの言葉があり、ボラン



ティアさんからも日頃の感想や活動内容等の紹介がありました。各グループと病院長との記念撮影を行うなど、終始寛いだ雰囲気です。会を終りました。

■ ボランティアさん募集

当院ではボランティアさんを募集しています。詳しくはホームページをご覧ください。

- ボランティアホームページ
<http://www.med.nagoya-u.ac.jp/hospital/1411/volunteer.html>

病院からのお知らせ

中央採血室 リニューアルのお知らせ

松本 祐之 臨床検査技師長

中央採血・採尿室は2006年11月に現在の中央診療棟に開設して8年が経ちました。開設時は1日に採血する患者さんの数は平均500人程度でしたが、最近は平均700人、多い時は1,000人を超えることもあり、採血室内は混雑し、またシステムの老朽化もあり、患者さんにはご不便をおかけしておりました。

そのような中、ついに昨年11月にリニューアルオープンしました。リニューアルにより採血スペースが広くなり、採血台も8台から12台に増設しました。また、システムも新しく更新し、患者さんごとに採血管や尿カップにバーコードラベルが自動的に貼り付けられ、そして患者さんや採血者の個人認証にもすべてにバーコードシステムを使用するようになりました。

また、医療の質向上のために、採血手技も標準採血法に従って改善を加え、採血針は当然のこと、使用したホルダー、手袋も患者さんごとに交換をしています。そのため、おひとりにかかる採血時間はやや長くなるものの、待ち時間に影響のないよう取り組んでいます。

今後も安全で確実な採血をめざして努力していきたくて思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



名大病院のユニフォーム刷新について

名大病院では、白衣や看護衣等のユニフォームを一新することになりました。昨年7月より若手を中心としたワーキンググループを立ち上げデザインや機能について積極的に検討が重ねられてきました。新しいユニフォームは紺色のラインで統一感を持たせてあり、肩には名大病院のロゴマークが入ります。名大病院職員としての誇りを持ち、より一層息の合ったチームワークを生み出していくことを期待しています。4月以降、順次新ユニフォームへ移行していく予定です。



■ 禁煙のお願い

患者さんの健康をサポートすべき医療施設として、病院敷地内の全面禁煙を実施しています。皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

がんによる心身の苦痛を和らげる 緩和ケアチームが充実

名大病院は「地域がん診療連携拠点病院」として、地域のがん診療の中心的役割を担っています。その役割の一つである緩和ケアの充実に向けた取り組みについて、緩和ケアチームの杉下美保子病院助教にお話を伺いました。

多職種で痛み、辛さをフォロー

がんなどの悪性腫瘍に冒されると、身体的には「痛い、息苦しい、食欲がない、眠れない」、精神的には「不安、苛立ち、気分が落ち込む、怖い」など、苦痛や不安を感じることがあります。こうした症状を軽減し、より豊かな生活を送れるようにするのが緩和ケアです。名大病院ではこの緩和ケアに集中的に取り組むため、化学療法部に緩和ケアチームを設置しており、現在、医師3名、看護師2名、薬剤師2名の7名で活動しています。

医師は身体症状担当2名に加え、昨年4月から精神科の医師が専任となりました。これで、精神症状ケアがより充実し、せん妄や抑うつに苦しむ患者さんへも臨機応変に対応ができるようになりました。

患者さんの割合としては現在、入院7外来3ですが、徐々に外来での件数が増えています。また、全体の緩和ケアチームへの依頼件数も増え

緩和ケアチームは、医師、看護師、薬剤師の3職種が一組となり、週に2回病棟を回診します。そこで病棟の看護師や担当医から相談を受けた患者さんを診察し、チームで相談した上で、担当医に、それぞれの患者さんにとって適切な治療や薬を提案します。各診療科の医師、看護師から依頼を受けることもあります。入院だけでなく、外来の患者さんの診察も行っており、退院した患者さんも外来で引き続きケアを受けることができます。

がんの患者さんの痛みは、身体的な痛みだけでなく、精神的な痛みや社会的な苦痛、不安など多面的です。そのため、緩和ケアではさまざまな職種の専門家で支えることが重要であり、緩和ケアチームでは多職種での連携や、学習会を通じて緩和ケアについて知ってもらう取り組みなどを継続的に続けています。今後も、緩和ケアを通じて、できるだけ患者さんが希望する生活を送れるようにサポートしたいと思っています。

患者さんの希望に沿ったケアのために

てきており、緩和ケアの必要性、重要性が周知されてきたのを実感します。一昨年、名大病院は「小児がん拠点病院」にも指定され、小児がん患者の緩和ケアチームへの依頼も増えてきています。

【医師（精神症状専任）】足立先生
がんと診断されたら誰でもショックを受けます。そんな初期から末期までの幅広いがん患者さんの精神的な辛さに対応しています。がんが進行するとせん妄や意識障害が起きることがあるので、患者さんが最期まで尊厳を保ち、家族と充実した時間を過ごせるように努力します。

【医師】杉下先生、十九浦先生
「痛い、気持ち悪い」などの患者さんの身体症状に対し、こんな薬はどうか、薬以外のこういう治療はどうかなどを提案します。話しやすい雰囲気を作って患者さんの声を拾い、担当医の先生方と協力して、患者さんの痛みを少しでも軽くできればと願っています。



〈緩和ケアチーム 各職種のご紹介〉

【薬剤師】宮崎薬剤主任、加藤薬剤師
薬物治療がスムーズにできるよう服薬指導をするのが薬剤師です。緩和でよく使うのは麻薬ですが、抵抗を持たれる患者さんとよく話し合い、安心して飲んでもらうように努めています。緩和ケア領域では新薬が続々と出てくるので、最善の提案をするため情報収集が欠かせません。

【看護師】伊藤副看護師長、原副看護師長
看護師は、緩和ケアチームと患者さん、病棟のスタッフを結ぶのが大きな役割。患者さんの人生観や価値観、どのような生活を目指したいのかなどの希望に添って、苦痛緩和できるように心がけています。

健康講座

「脳の記憶」

脳神経外科長 若林 俊彦

先日、ある劇団と組んで、「認知症」をテーマにした演劇の監修を担当する機会に恵まれました。脚本家や演出家と一緒に、認知症の患者さんを持つ家族の悲しみとそれを助ける仲間の心温まるストーリーを創作するところから始まりました。

家族の繰り返される「平凡」な「毎日」が、ある日突然、その歯車が狂い始めます。最初は、いつもの「ぼけ」や「勘違い」、「あわてんぼう」程度にしか思っていなかったことが、「事の重大さ」に気が付きますが、もはやもとの状態に戻ることは不可能とわかったときの、本人と家族や仲間の焦燥感はありません。その「患者さん」を家族や仲間達はどのように接していくべきなのか今回の脚本の基本構想でした。もちろん正解などはありませんが、今の時点での最も答えに近いものは何なのかをまさに手探り状態で見つける作業のようなものでした。

ようやく出来上がった原稿の中に見つけた答えは、結局、「今まで行ってきた普段の付き合いを、仲間がそろって出来る限りそのまま維持すること」でした。「脳の環境」を今まで通りに「平凡な日常」のなかに置いてあげて、心の不安を穏やかに取り去ってあげることが、最も良い治療法になるのです。新たな「脳の記憶」が入っていかない「認知症」という状態の中で、過去の記憶のなから、見覚えのある安らかな心になれる、どこか懐かしい風景や幼なじみの顔に、その心は自然と穏やかになっていく。まさに、「平凡な日常

の穏やかな毎日」こそが、どんな治療薬や治療方法にも勝る、もっとも心に優しい「治療」なのです。

これと似たような心の研究で有名なのが、いわゆる「déjà vu（デジャブ：既視感）」の脳科学です。はじめての場所、あるいは初対面の人なのに、なぜか懐かしさを感じさせるこの超常現象は、人間の五感と脳のなせる神秘的ワザだといわれています。そのような現象に関わっている脳の海馬の不思議な情報保持能力は、我々人類にとってかけがえのない宝物です。普段は心の奥底深くにしまい込まれていて、見ることも出来ない情報ですが、例えばその人が人生の危機に直面したときに、この海馬が最も有効な手段を導きだし、一見、脈絡も何も無いような出来事の想い出が瞬時に記憶に上り、脳を刺激し、我々を窮地から救おうとして作動しているのではないのでしょうか。万事休すのその瞬間に、まだまだ我々の脳には生かそうとする生命維持装置が稼働して、体全体に生きていく気力が蘇り、重大局面を打開し元気になっていく、そんな自分に出会えるかもしれません。その海馬が壊れる「認知症」では、そのような恵みが作動できない状況であるため、家族や仲間がそれを支え、代行することが肝要なのです。

劇団の役者さんの連日の舞台稽古にも出向きましたが、その真に迫った演技を見ているうちに、いつしかストーリーのなかに溶け込み、そして、皆と喜怒哀楽を共にして、脳の記憶の不思議を考えさせられる素敵な体験でした。



登壇の様子

看護師募集



当院では看護師を募集しています。詳しくはホームページをご覧ください。

● 看護部ホームページ
<http://www.med.nagoya-u.ac.jp/kango/index.html>

退職・退任の挨拶



退職の挨拶

糖尿病・内分泌内科長／教授 **大磯 ユタカ**

長らくお世話になりました名大病院を本年3月末付けで定年退官することとなり一言ご挨拶申し上げます。

私は診療科の名前が示す通り「糖尿病」と「内分泌疾患（ホルモンの病気）」を診療する糖尿病・内分泌内科の科長として12年間担当させて頂き、それ以前の時期を含めると40年近く名大病院で診療に当たってきました。患者数が急増している糖尿病や、甲状腺、下垂体、副腎などの内分泌疾患の診療に励んできましたが、これら疾患の多くは慢性疾患であるため30年以上にわたって私が担当させて頂いた患者さんも少なくないだけに、この度名大病院を去ることは感慨深いものがあります。

お世話になった多くの方々に深謝申し上げますとともに、今後の皆さまのご健勝と名大病院の発展を心から願っております。



退職の挨拶

神経内科長／教授 **祖父江 元**

名大病院には1995年4月に前任地である愛知医大から異動しましたので、今年で20年になります。大変長い間お世話になり、ありがとうございます。この間、名大病院も大きく変化してきていると思います。外来棟、病棟、中央診療棟の建て替え、電子カルテの導入、医療安全の考え方、法人化による中期目標・中期計画型の考え方、DPCの導入など本当にめまぐるしい変化がありました。この中で私が最も大きく変わったと感ずるのは、医療に対する考え方とそれを具体化するシステムの変化だと思います。縦割り型の、いわゆる旧国立大学附属病院型の医療体制から職種連携・チーム医療型の、患者さん本位のスタイルに大きく変わったことではないかと思えます。医療スタッフ間の密な連携や、医療の質・安全、患者さんの満足度を目指して医療を進めるというスタイルに大きく変わってきたと思います。一方では研究型大学附属病院として、このスタイルを保ちながら高いレベルの臨床研究をどう推進するのかがさらに問われているのだと思います。

今後の名大病院の益々の発展をお祈りしております。



退任の挨拶

看護部長 **三浦 昌子**

1977年4月に入職し38年間、内2006年に看護部長に就任し8年間、多くの皆様方に助けられ部長職を務めることができたことを心から感謝申し上げます。

この8年間ひたすら走り、改革、改善と行なってきました。その最も大きな事業が基本入院料である7：1による人員確保と新人の教育制度の取り組みでした。2006年から2013年にかけて340名の増となりました。人は増えても現場の忙しさは変わらない中少しでも働きやすい職場づくりを目指し、看護部一丸となり改善をしてきました。また、一人一人のキャリアパスを考えた仕組みにも力を注ぎ、多くの優秀な人材が地域に貢献してくれています。文部科学省大学改革推進事業「看護師の人材養成システムの確立」においての事業にも着手でき成果をあげることができました。

今後は、看護師のキャリア支援していく立場として名古屋大学の発展に貢献できればと思います。



名大病院探訪

名古屋大学医学部は、1914（大正3）年に現在の鶴舞キャンパスに新築移転し、2014（平成26）年に100周年を迎えました。今までの鶴舞キャンパスの歩みを写真にて振り返ります。

1958年



2003年



2010年



鶴舞キャンパス航空写真



名古屋大学医学部附属病院に移築した愛知病院正門遺構
鶴舞キャンパスには、1914年移転当時の愛知県立医学専門学校・愛知病院の門と囲障がそれぞれ遺構として残されています。



愛知病院正門と鶴舞公園からの景色



1915年11月3日に愛知県立医学専門学校・愛知病院の新築落成記念として作成された絵葉書



1991年当時の名大病院